最近のワイルド批評 (2008年4月～2009年3月)

多様化する文化の中で生き続けるWilde

John Bristow ed., *Oscar Wilde and Modern Culture: The Making of a Legend* (Athens: Ohio UP, 2009)

鈴木ふさ子

プロローグ～ある時代の終わりに寄せて

2009年、ニューヨークはグリニッチ・ビレッジのとある老舗書店がその42年間の歴史の幕を閉じた。Oscar Wilde Bookshopが閉店したのである。米国で同性愛者に対する権利要求が声高に叫ばれるようになっていた1967年、その筋の活動の先駆者として知られるCraig Rodwellが、同性愛関連の文学のみを扱う初の書店として誕生させて以来、われらがWildeの名を冠したこの書店は、同性愛の活動家たちの集会の場にもなり、大都会ニューヨークで単なる書店以上の存在意義を有してきた。この伝説の本屋の閉店の理由は、折からの不況によるという。だが、2010年4月にこの書店の跡地を訪れた際、隣の店の主人は、依然として同性愛に対して根深い偏見はあるものの、60年代に比べれば反発も和らいだ現代にあって店の持つ求心力が薄れていったことも影響したのではないかと話していた。

ひっそりと店をたたんだWildeの名を冠した同性愛関連書籍専門書店。その半世紀近い歴史を紐解くだけでも、近年の同性愛を取り巻く状況の変化が垣間見える。店を立ち上げた時、理想に燃える若き活動家は同性愛の守護神、あるいは同志としてWildeの名を自らの店に冠したのではないか。ストーン・ウォール事件やゲイ・パレードの実施など米国における同性愛の権利獲得活動を語る上で欠かせない数々の歴史的瞬間に立ち会ってきたOscar Wilde Bookshopの閉鎖は、ある時代の終焉を表しているのかもしれない。

ところが、こうした時代の趨勢の中にあっても、店のシンボルであったOscar Wildeその人が忘れ去られる気配はない。それどころか、2008年にはミステリー

小説 *Oscar Wilde and a Death of No Importance* が出版され、オークションではどの現代作家よりもその手稿には高値がつくという。もちろん、この作家に捧げられる学術的活動の量もかつてないほど増えてきている。つまり、大衆的なレベルにおいても学術的レベルにおいても Wilde への関心は高まるばかりなのである。だが、なぜ死後 110 年が経とうとしている現在も Wilde は「生き続けている」のか。ここで取り上げる *Oscar Wilde and Modern Culture: The Making of a Legend* (Ohio UP, 2009) はこの問いに少なからぬ示唆を与えてくれるだろう。

概略～死後 20 年間における復活劇など

編者 Joseph Bristow によれば、この本に収められている 12 編の論文はいずれも「25 年間の作家人生において毀誉褒貶の渦に巻き込まれた才能あるアイルランドの作家［Wilde］が、どのようにして、なぜ、19 世紀後半、20 世紀、そして 21 世紀初頭にわたって次世代の作家、批評家、作曲家、ダンサー、映画製作者、役者の注意を引いてきたのかを明らかにする」ことを目的に書かれており、「この研究書が存在するという事実こそ、Wilde の持つ、そしてこれからも彼が現代の文化に持ち続けるであろう抗しがたい力によっていかに学術的研究者が魅了されるのかを証明している」という。

Bristow による「序」は Wilde の訃報を伝える *London Times* の記事から始まる。酷薄な死亡記事は、その名を語ることさえ憚られた作家がそのまま永遠に社会から葬り去られるものだと誰もが信じて疑わなかった当時の状況を想起させる。Bristow はこの状態から Wilde がどのようにその名声を取り戻していったのか、その軌跡をたどることに筆を惜しまない。その大部分はよく知られている事実の総括であるが、Wilde が奇跡の復活を果たしたことにより、実際に彼がキリストのように復活すべきだとする珍説がアメリカで囁かれるようになり、1908 年に Wilde 目撃情報が新聞を賑わせたことや 1920 年代初頭に Wilde の手紙と仮面劇の贋物が横行したことに詳しく触れている部分は特筆すべきであろう。本人の劇的な復活はもとより、それに伴う人間模様、まことしやかな作り話、ミステリー小説に登場しそうな贋作家たちなど、そのひとつひとつが独立した物語のように興味をそそり、Wilde がいかに人心をつかむ存在であったかが伝わる仕組となっているからである。

続く論文は、晩餐の席での会話（table-talk）、ポートレート写真、象徴主義と無政府主義の問題といった、それぞれこれまであまり注目されてこなかった 19 世紀末の文化事象の中で Wilde を捉えた３編が並ぶ。その後は Hofmansthal, Mirbeau, Proust, Somerset Maugham といった作家、アメリカの舞踊家、フランスのシュルレアレストの写真家、Wilde の裁判記録、Wilde を扱った戯曲、イギリスの映画監督、ハリウッド映画などを通して Wilde の考察を試みる論文が連なっている。

いくつか例を挙げてみよう。Lucy McDiarmid の "Oscar Wilde, Lady Gregory, and Late-Victorian Table-Talk" は、一流の政治家や作家が集まる 19 世紀末のロンドンにおいて、公的な場でもあり、私的な場でもあった晩餐の席での table-talk がどれだけ政治的影響力を持っていたのかを Lady Gregory と Wilde の例を通して明らかにしている。この論文は、まさに「イギリスの晩餐のテーブルを制していた」当代随一の話し手 Wilde が 1894 年 7 月に晩餐会で内相 Henry Asquish のことをからかい、その数か月後 Asquish によって有罪の判決を受けるという、table-talk にまつわる皮肉な逸話で締めくくられている。Erin Williams Hyman は "Salomé as Bombshell, or How Oscar Wilde Became an Anarchist" で Wilde と無政府主義の関係について論じている。Wilde は当時のフランスで無政府主義者とほぼ同一視されていた象徴主義の作家やジャーナリストと交遊があった。Hyman はこの点に着目し、Wilde が投獄された翌年の 1896 年にフランス象徴主義にゆかりの深い劇場 Théatre de l'Œuvre が危険を承知の上で *Salomé* を上演した経緯について、Wilde の釈放を訴える署名嘆願に失敗した象徴主義者たちが Wilde の支援を彼の戯曲を上演するという形で行ったとされるのが一般的だが、実際は *Salomé* という戯曲に多分に表れている無政府主義的な要素（宗教的権威（Jokanaan）と政治的権威（Herod）を脅かす Salomé は無政府主義者と解釈できる）のためであったことを示唆し、Wilde がどれだけ真面目な無政府主義者だったかは別として、象徴主義者と無政府主義者が同一視されていたこの時代において Wilde の主張は無政府主義者たちと同じであったと結論づけている。Wilde と象徴主義との関係はこれまでしばしば注目されてきたが、無政府主義という側面からは George Woodcock の *The Paradox of Oscar Wilde*(1949) 以外で取り上げられたことはほとんどなく、新たな切り口を示していると言えよう。

その他、Flaubert や Mallarmé、Huysmans、Wilde らによって描かれた *Salomé* の文学的厚みを、その筋書きを変えて演じようとしたアメリカの女性舞踊家 Loïe Fuller（1862-1928）の限界を通して再考した論文、Maugham の戯曲 *Penelope*（1909）と *The Constant Wife*（1926）において *An Ideal Husband*（1895）と *Mr. and Mrs. Daventry*（1900）で Wilde が織り込もうとした結婚における男女の平等がどのように投影されているのかを示した論、法律学者による Wilde 裁判の記録の正

確さを問題にした異色の論文も含まれている。

同性愛のコンテクストの中の Wilde

しかしながら、「最近の Wilde 研究」の動向を考える上で注目したいのは、この論文集に収められた 12 編中 7 編の論文が Wilde の「性」の問題を主題にしている点である。周知の通り、編者の Bristow は *Effeminate England: Homoerotic Writing after 1885* (New York: Columbia Press, 1995) の著者である。したがって、この種の論文が多いのも予測がつこうというものなのだが、このことを考慮に入れても、これだけ多彩なアプローチを見せるそれぞれの論考に触れると、「性」の問題が Wilde 研究においていかに大きな位置を占めているか、今後の Wilde 研究の方向性を占う上でもこの問題がいかに不可欠であるかを改めて認識せずにはいられない。

たとえば、Lizzie Thynne の "Surely You Are Not Claiming to Be More Homosexual than I?: Claude Cahun and Oscar Wilde" では、フランスのレズビアンでシュルレアリストの写真家 Claude Cahun（1894 – 1954）のセルフ・ポートレートや著述における Wilde の影響を考察している。壁に大きな四角い布を貼っただけの背景にダンディ風の衣装や水夫とおぼしき格好、肩を露にしたドレスなどに身を包む Cahun のセルフ・ポートレートはたとえ衣装がジェンダーを明確に示すものであったとしても、その剃髪した頭の印象が強烈過ぎて男女の区別は曖昧にならざるをえない。こうした Cahun のポートレートは、分類されることやアイデンティティを探られることを拒絶しており、外見とは「仮面」に過ぎず、外見に本質的なアイデンティティを探る「鏡」の役割は期待できないという Wilde の考えを体現していると受け取ることができる。また、Cahun は 1925 年に "Salomé the Skeptic" という物語を Wilde に捧げているが、預言者の首に興味を持たない Cahun の Salomé 像には、Cahun がレズビアンとして芸術家として目指そうとした芸術の方向性が投影されている。Claude Cahun の特異で先駆的な作品が再発見され、注目されるようになってきたのは 80 年代後半のことだが、同性愛に殉じた Cahun と Wilde との比較という視点はもとより、女性の同性愛者が Wilde の理論や作品をどのように解釈し、自己の作品に取り込んだのかを知ることができる点で新鮮で貴重な研究である。

同じく同性愛の人物と Wilde の比較を扱った研究に Matt Cook の "Wilde Lives: Derek Jarman and the Queer Eighties" がある。Derek Jarman（1942-1994）はゲイの活動家で HIV に感染し、AIDS により死亡したイギリスの映画監督である。複合的な治療によって HIV や AIDS 患者に希望が見え始めた 2000 年以降ホモ嫌悪者の数は激減したが、AIDS が出現して「同性愛者の疫病」のようにみなされていた 80 年代から 90 年代前半は、ホモに対する反発が激化したという点で、同性愛者にとっては受難の時代であった。この時期、Wilde に関する本が数多く出版されたが、これは、従来のように Wilde を正当化したり、お定まりの同性愛の宿命の物語を練り直すというものではなく、アイデンティティと性の主観性という観点から Wilde の重要性を探ろうとする現象であった。この論文は 80 年代から 90 年代前半を潜り抜けた HIV や AIDS に冒されたゲイたちにとって Wilde が自己肯定や忍耐を持続するための指針となる存在であったことを Jarman の日記を通して明らかにしようとしたものである。たとえば、病魔と闘い、一般の人々の日常とは異次元の、しかも余命の限られた時を生きる Jarman にとって時間は歴史的、年代的な意味を持たず、有用性や合理性や進歩といった未来のためのものでもなく、ただ感覚によって認知される美的瞬間の連続であり、「たったいま、この瞬間」だけを表した。このことは Pater の唯美主義的な時間の捉え方や *The Picture of Dorian Gray* の Dorian の人生の 18 年間がたった 1 章で語られる手法など Wilde の時間の捉え方と共通している。さらに、空間と自然を、個人主義を促すための場として考えている点も共通しており、荒地に建てた Prospect Cottage の庭に熱帯の花を植えながらエデンの園を思い描く Jarman の姿には、獄中でギリシア語の聖書を読みながら百合の庭に思いを馳せた Wilde の姿が重ね合わされる。こうした共通点がある一方で、Jarman は、Wilde の同性愛は逸脱であり、異性愛が彼にとって主流であったとする Richard Ellmann の伝記に見られる Wilde 観に異義を唱えるなど、自分と異なった Wilde 像を認めようとはしなかった。Jarman のこうした姿勢から、Wilde は Jarman にとって疎外感やホモ嫌悪者たちの脅迫をはねのけ、自己を肯定させてくれる存在であったことが窺える。Cook によれば、Jarman の Wilde への直接的言及はほとんどないということだが、Jarman の映画 *Sebastian* と Wilde の聖セバスチャンの捉え方との比較研究や Jarman の同時代人における Wilde の影響といった総括的な研究など今後の研究の広がりにも期待できる論文である。

Oliver S. Buckton の "Oscar Goes to Hollywood: Wilde, Sexuality, and the Gaze of Contemporary Cinema" は Wilde の「性」と伝記の問題を考えさせてくれる点で興味深い。先の Jarman にも当てはまることなのだが、Wilde の同性愛を論じる上では 1985 年に出版されて以来 Wilde 研究に大きな影響を及ぼしてきた Ellmann による伝記 *Oscar Wilde* を研究対象がどのように解釈しているかを探ることがひと

つの鍵となる。つまり、主に異性愛者であるWildeが生来的に同性愛の要素を持っており、それがRossによって開花され不当に罰せられたとするEllmannの見解を肯定するか否かという問題である。2005年に出版された*The Secret Life of Oscar Wilde: An Intimate Biography*の著者Neil McKennaのようにに代表されるWildeの性の捉え方に疑問を呈し、Wildeは色情狂であり、そのやむにやまれぬ性欲によって家庭も名誉も破滅させたとする見解も出てきているからである。

Buckton によれば、Brian Gilbert監督の映画*Wilde*（1997）はEllmannの伝記に基づいて製作されたという。また、Oliver Parker監督が手がけた*The Importance of Being Earnest*（2002）もこの伝記の流れを汲んでいるという。*The Importance of Being Earnest*で使用される言葉"Bunburying"を例に挙げると、原作ではこの言葉が具体的にどのような遊びを指すのかは決して明確にされず、男娼と遊ぶことを暗示しているのに対し、映画ではクラブでの女遊びを意味する言葉になっている。こうしたいくつかのマイナー・チェンジによって原作に潜んでいる同性愛的な含みは見事に払拭され、AlgernonとJackは異性愛者に仕立て上げられている。結論としてはハリウッド映画で受け入れられるにはヴィクトリア時代に求められた種類の「健全さ」が必要であり、WildeもWildeの作品も例外ではなかったことが指摘されるのだが、その「健全さ」を促す遠因となったEllmannの伝記をわれわれが再考する時期にきていることを痛感させられる論文でもある。

同性愛に関する他の4編については、ひとつは後述の「エピローグ」で言及するが、残りの3編については、ドイツにおける初期の同性愛の権利運動にとってWildeがどのような存在であったのかを論じたYvonne Ivoryの"The Trouble with Oskar: Wilde's Legacy for the Early Homosexual Rights Movement in Germany"、そしてRichard A. Kayeの"Oscar Wilde and the Politics of Posthumous Sainthood: Hofmansthal, Mirbeau, Proust"のように同性愛に殉じた聖人としてWildeがそれぞれの作家の作品においてどのように描かれているのかといったアプローチも見られ、同性愛者として戯曲に登場するWildeの変遷を考察したFrancesca Coppaの"The Artist as Protagonist: Wilde on Stage"もある。

エピローグ～永世の秘密

三島由紀夫が自決した当日に机の上に残していったメモには「人生は短いが、私は永遠に生きたい」と書いてあったという。泡沫のように忘れ去られる作家が多い中で、命を吹き込んできた自作を永遠に読み継いでもらうことは、作家にとって夢であり、永遠の生を得るのと同じ重みを持つのだろう。そして、Wildeはこの夢を実現しつつある。

Daniel A. Novakは"Sexuality in the Age of Technological Reproducibility: Oscar Wilde, Photography, and Identity"の中で、19世紀末の写真技術の進歩とともに表れてきた写真の再生産、モデルとポーズの問題を、当時のアメリカで有名人の写真を撮影したら右に出る者がいないと言われたNapoleon Sarony（1821–96）によるWildeのポートレート写真や*The Picture of Dorian Gray*を通して考察し、Wildeの「性」はどのようなものなのかを模索している。NovakによればSaronyによって撮影されたWildeのポートレート写真は同性愛者の典型的なイメージ（髪は長く、手首をくねらせ、首をかしげている）を視覚的に定着させると同時に、そのイメージの所有者は一体誰なのかという問題をも提起しているという。つまり、イメージはポーズをとったモデル（Wilde）のものなのか、イメージを考案した写真家（Sarony）のものなのかという問題である。このことは、モデルの定義という問題へと深化していく。モデルにはただ現実を写し出すためだけの、いわばリアリズムの領域に属するモデルと理想的な美を構築するために「無」の素材となって唯美主義の世界の一部となるモデルの二種類がある。たとえば、*The Picture of Dorian Gray*のSybil VaneはSybil自身である瞬間がなく、Shakespeare劇のどんなヒロインにもなれた時には唯美的な世界を具現するモデルとしてDorianを魅了するが、Dorianに恋して演技ができなくなり、ただの現実世界を写し出す女（リアリズムのモデル）になった途端にDorianに捨てられる。もちろん、そのDorianは唯美主義にとって理想的なモデルである。SaronyにとってWildeがそうであったように、DorianはBasilの抽象的な美的概念に器を与えてくれる存在であったからである。しかし、Novakによれば、Dorianに投影されたBasilの理想が抽象的である以上、Dorianは抽象的であり続け、そのイメージは永遠に再生産され続けるという。Novakは、何にでも再生産可能な肉体を求める時代の「性」とは常に定義できない抽象的なものであり、いつでも製造途上であり、Wildeの「性」もまた同様であるとしている。つまり、Wildeの「性」は完成することがなく、定義できないというのである。

このことはWildeその人に対しても当てはまるのではないだろうか。光の当て方によって様々な色を放つ可能性を秘め、「何色」と定義ができないところが彼の魅力であり、だからこそ研究意欲を駆り立てられもする。そこに彼の永世の秘密があるのかもしれない。レインボー・フラッグがはためいていた伝説の書店Oscar Wilde Bookshopはその役割を果たし、もはや伝説に新たな彩を添えること

はない。だが、90年代に出てきたクィア・スタディによって性の領域が広がり、ますます抽象化し複雑化していく同性愛というコンテクストの中でWildeが注目されていくことは必至だろう。時代も文化も乗り越え伝説を更新し続けるWildeは19世紀末もいまも未来も、その途上性、曖昧さゆえに新しい。*Oscar Wilde and Modern Culture: The Making of a Legend* はこのことをたしかに証明している。